興福寺蔵『明本抄』奥書の検討

奈良市興福寺には、指定品など単品保管のもの以外に、100箱以上の典籍文書箱が所蔵されている。現在、それら典籍文書箱の資料は奈文研歴史研究室で調査継続中であるが、その第92函に『明本抄』一部13冊が収められている。『明本抄』は、同寺蔵ですでに重要文化財に指定されている巻子本13巻がよく知られているが、第92函の『明本抄』も、袋綴装と装幀は異なるものの鎌倉中期の写本で奥書も詳細であり、両者の関係につき、奥書を比考し検討することは聖教の写本の成立を考える上で意義があろう。また東大寺図書館にも巻子本『明本抄』10巻が所蔵されており、それとの関係も検討することにする。

『明本抄』は因明に関する貞慶（1155～1212）の撰述書である。彼が亡くなる直前の建暦２年（1212）に成立したが、貞慶は視力の衰えからその浄書を良算に依頼した。その良算浄書本『明本抄』は、同年12月23日に貞慶から東北院僧都院玄と光明院律師覚遍に分与されたが、その際13巻を上帙（第一～第七）７巻と下帙（第八～第十三）６巻に分け、上帙を院玄に、下帙を覚遍に与えたのである。ところで指定品『明本抄』は、『奈良六大寺大観　興福寺一』解説（田中稔氏執筆）によれば、筆者は上帙分は光明院覚遍であり、下帙分は正覚房良算とされる。すなわち覚遍が後の文暦２年（1235）４月に院玄が受領した上帙分を書写することにより、彼自身が分与された下帙分とあわせて『明本抄』一部が完備したのである。その結果覚遍本と称されるこの『明本抄』は上帙分は覚遍筆、下帙分は良算筆の一部13巻となり、その後重書として一乗院門跡相伝で伝えられている。

田中論文（「興福寺所蔵覚遍本明本抄および紙背文書」『年報1961』）に指摘があるように、『明本抄』の写本は興福寺などに何本か伝来している。第92函に収納されている『明本抄』もその一つであるが、縦二九糎前後、横二三糎ほどの袋綴の冊子で、全巻筆者は聖禅であることが奥書からわかる。聖禅は第一から第十三までを正嘉２年（1258）～文永４年（1267）の間に、巻次の順不同で書写をおこない、書写の場所は正元・文応頃は東大寺尊勝院中御堂、弘長頃は尊勝院経蔵、そして弘長・文永期は東大寺鼓坂住坊と東大寺尊勝院周辺である。書写の順序は、表に見えるように第三、第二、第四、第五、第六、第十三、第一、第八、第七、第十一、第九、第十二であり、最後は第十である。最初に書写した「第三」の聖禅書写奥書は次の通りである。

正嘉二年四月十四日書写了、大法師聖禅〈五十七／四十三〉、始自四月十二日終至同十四日書写了、

とあり、その後にあわただしく急ぎ書写したことを記すが、この巻には書写した場所の記載は見えない。そしてこの書写奥書の前には、宗性が東大寺尊勝院中堂東廊で建長６年（1254）９月晦日から書き始め同年10月29日に書写し終わったことを記す本奥書が記されている。また聖禅書写奥書の後には、

文応元年九月廿日〈申／時〉、以尊勝院御本注直之、
并委交之了、　　大法師聖禅〈五十九／四十五〉

と聖禅が「尊勝院御本」を以て補訂しており、さらに、

此本聖禅私取意、少々略之、仍交合正本書入之了、
弘安元年七月三日　権律師宗顕

と、弘安年間に宗顕により正本（覚遍本か）による校合がおこなわれていることがわかる。宗顕の奥書はこの「第三」しかみえないが、聖禅本の第一～第十三のすべての表紙左下に「権律師宗顕」とあり、弘安期以降は宗顕の所持になっている。ただし第一～第三の３冊については、「宗顕」の部分が截断もしくは擦り消されており、宗顕の後、他者に所蔵が移ったようである。

ところで聖禅が書写の底本としたのは、聖禅の書写奥書の前に記されている宗性書写本であった。それは聖禅書写奥書のなかで「尊勝院御本」と称されている。

この宗性書写本は、建長６年（1254）から７年にかけて貞慶を尊敬していた宗性が覚遍本『明本抄』を借り出し書写していることが、東大寺図書館蔵本の第六、第七の奥書に「写本云、文暦二年四月六日於三条万里小路宿所書写畢、（中略）因明老学覚遍」とみえることからわかる。ただし現東大寺図書館蔵本は宗性筆とは断定はされておらず、宗性手沢本とされている。そして筆跡と署名からの判断により第一、第二は印覚の書写であると判断されている（『宗性・凝然写本目録』）。この宗性手沢本は建治元年（1275）に東大寺尊勝院で如円房朝海に対し読誦され、弘安６年（1283）と９年には印寛により「光明院本」との校合がおこなわれていることが追記の奥書からわか

る。この光明院本とは覚遍本のことであろう。そのことを示す第四の奥書は次のようである。

［第四奥書］

文永十二年〈乙亥〉四月十七日〈申時〉、於東大寺尊勝院新建立小堂、対如円房朝海談之畢、

前権僧正宗性　（中略）

弘安九年〈丙戌〉九月廿一日、於孝恩院以〈本所〉光明院之本一交了、　法印権大僧都印寛

なお院寛の光明院本による校合奥書は、宗性手沢本全巻にわたり、印寛が書写本について本文の校合を覚遍本により再確認していることがわかる。

東大寺図書館蔵本の宗性手沢本と目されている『明本抄』は、第三、第五、第十三を欠くが、巻子本で、当然のことながら聖禅本に転写されている宗性の本奥書が記されている。書写の期間は、表にみるように建長６年９月から同７年６月までの間で、概ね巻次を追って着実に書写されている。ただし第七は菩提山権僧正導信が借用していたためその返付後になり最後に書写されている。書写をおこなった場所は、第一～第八は東大寺尊勝院中堂東廊であったが、建長７年（1255）６月の長洲庄新在家と賀茂供祭人との間に相論が起こった関係で東大寺が閉門となったため、第九以後、最後の第十三までは中川地蔵院本堂に移って書写を完了している。なお第六、第七には覚遍の書写本奥書が書かれている。

そしてこの宗性が覚遍から借用して書写された『明本抄』を、さらに聖禅が書写し、その聖禅書写本が現在の興福寺典籍文書箱第92函収納の『明本抄』となるのである。

なお東大寺所蔵本には第五が抜けているが、現在興福寺第92函に聖禅本とともに収納されている重複した第五がある。その第五には次のような建長６年（1254）11月20日の宗性書写奥書がある。

［第五奥書］

建長六年〈甲／寅〉十一月二十日〈申／時〉於東大寺尊勝院中堂東廊馳筆畢、（中略）

右筆華厳宗末葉法印権大僧都宗性

〈年齢五十三／夏臘四十一〉

この奥書は他の宗性手沢本とほぼ同じであり、もと東大寺図書館蔵本と一具であった可能性がある。各「明本抄」の形態は、覚遍本と東大寺図書館蔵本が巻子本、聖禅本が袋綴装であり、体裁による残す本と使う本の使い勝手の違いも判明する。なお紙背文書については今後の課題としたい。

以上、『明本抄』奥書は興福寺と東大寺の学僧の教学に関わる交流を詳細に物語っている史料といえよう。

（綾村　宏／客員研究員）

貞慶草稿一部⇒良算清書一部
- 上帙（第１～第７）　⇒院玄
- 下帙（第８～第１３）⇒覚遍

覚遍、院玄分の第１～第７を自ら書写、一部とする　⇒宗性書写　⇒聖禅書写
（重文『明本抄』）　（東大寺図書館）　（第 92 函）

図60　『明本抄』書写系列

表７　聖禅本奥書からみる『明本抄』写本書写時期

貞慶	良算	覚遍	宗性	聖禅	宗顕
第一			建長６(1254)・９・25	弘長３(1263)・７・１	
第二			建長６・９・29	正嘉２(1258)・８・10	
第三			建長６・10・29	正嘉２・４・14	(弘安１(1278)・７・30)
第四			建長６・11・６	正元１(1259)・６・７	
第五			建長６・11・20	文応１(1260)・９・18	
第六		文暦２(1235)・４・６	建長７(1255)・４・26	弘長１(1261)・５・16	
第七		文暦２・４・17	建長７・11・８	文永１(1264)・４・13	
第八			建長７・６・２	文永２・④・８	
第九			建長７・６・８	文永２・８・１	
第十			建長７・６・14	文永４・５・17	
第十一			建長７・６・17	文永２・２・17	
第十二			建長７・６・21	文永２・８・18	
第十三　建暦２(1212)・12・23			建長７・６・25	弘長１(1261)・９・23	

聖禅は書写奥書年紀、宗性から左は書写本奥書年紀、宗顕は別筆追記年紀である。丸数字は閏月。